

クライング・フィスト

2006(平成18)年3月6日鑑賞(東映試写室)

★★★★



監督・脚本＝リュ・スンワン／出演＝チェ・ミンシク／リュ・スンボム／イム・ウォニ／ピョン・ヒボン／ナ・ムニ／キ・ジュボン／チョン・ホジン／アン・ギルガン／キム・スヒョン／オ・ダルス／ソ・ヘリン／イ・ジュング（東芝エンタテインメント配給／2005年韓国映画／120分）

……アメリカや日本に比べてボクシング映画の名作が少ない韓国にやっとそれが登場した。韓国映画らしく2人の主人公の性格は激しいが、そのキャラは対照的。2人の決勝戦はボクシングの試合というよりも人生そのものをかけた勝負。「格差社会」批判が噴出している日本だが、勝者と敗者が分かれるのはそんなに悪いこと……？ 少なくともこの試合の「敗者」がそう思っていないことはたしか。『春が来れば』（04年）に続いて1日に2本もチェ・ミンシクの主演作を観て両作品で涙を流すとは思っていなかったが……？

韓国映画にボクシング映画の名作誕生……？

ハリウッド映画には、『ロッキー』シリーズ（76年～）をはじめとして、『アリ』（01年）、『ミリオンダラー・ベイビー』（04年）、『シンデレラマン』（05年）などボクシング映画の名作が多い。日本にも石原裕次郎の『勝利者』（57年）など数多い。ところが、意外にも韓国映画にはボクシング映画の名作は少なそう。そこで、この映画によって韓国映画にボクシング映画の名作登場……と言いたいところ。

たしかに、この映画のクライマックスでのボクシングの試合は、パンフレットに「シナリオのないガチンコ対決」と説明されているとおり、何ともシリアスで迫力あるものに仕上がっているから、「ボクシング映画の名作」と表現することは、きわめて正当。しかし、この映画を単純にボクシング映画と言ってしまうの

は、あの『ミリオンダラー・ベイビー』と同じように少し抵抗がある。それはなぜ……？

好対照な2人のボクサーの人生とは？

この映画の主人公は、全く接点のない中年ボクサーのカン・テシク（チェ・ミンシク）と20歳のボクサーのユ・サンファン（リュ・スンボム）の2人。そしてこの2人の「新人王戦」での対決をクライマックスとして、それぞれの人生とは何かを浮き彫りにするものだが、この2人は年齢のみならず、その歩んできた人生そのものが好対照。

この映画が面白いのは、テシクとサンファンという2人の主人公の接点が全くないまま、まるで全く違う2本の映画のように、2人のものすごい人生模様を描いていくこと。中年男のテシクの人生の今がどん底なら、少年院の中で20歳を迎えたサンファンも今がどん底。2人とも自分をそう認識していたことは明らかだ。しかし、人生も株式相場と同じで、本当にどこが人生のどん底かは、その上がり下がりを経験してみて後からはじめてわかるもの。したがって、後から振り返ってみて、テシクのどん底とは、そして、サンファンのどん底とは……？

中年ボクサーのモデルは？

この映画でテシクのモデルとなったのは、日本の“殴られ屋”晴留屋^{はれる や あきら}明。私はこの人物を全然知らなかったが、1963年生まれの晴留屋明は、17歳でプロテストに合格し、20歳でプロデビューし、26歳で引退したプロボクサー。そして、引退後1度は事業に成功したものの結局は失敗して莫大な借金を抱えた中で、彼は1998年12月から新宿歌舞伎町などで、「殴られ屋」稼業を開始したとのこと。そこでこの映画は、この晴留屋明をモデルとしてテシクの人物像を組み立てているが、そこには共通のキャラとテシク独自のキャラが……。

テシクのキャラは？

この映画が示すテシクの際立ったキャラは次の3点。その第1は、1990年アジア大会のボクシングで銀メダルを獲得したという栄光を引きずっていること。こ

の「過去の栄光」が最大のポイントだが、それはややもすると人生を誤らせる大きな原因になることに……。

第2は、これは晴留屋明と共通することだが、一度は事業で大成功をおさめたことがあるものの、結局は事業に失敗して莫大な借金を抱えてしまうこと。そのうえテシクは、後輩のウォンテ（イム・ウォニ）の保証人になったため、ボクサー時代の後輩で、今は借金取りとなっているヨンデ（オ・ダルス）から、借金のカタとして栄光の銀メダルまでとられてしまうことに……。したがってこんな人生の体験の上に、彼が決勝戦に臨んで息子に語りかける言葉は印象深いもの……。

第3は、晴留屋明は妻子のために頑張り続けたらしいが、テシクは10年間のどん底生活の中で、とうとう妻のソンジユ（ソ・ヘリン）から見切りをつけられた上、一時は息子のソジン（イ・ジュング）も離れていったこと……。しかし、テシクの妻子との確執も最後には……？

20歳のボクサーのモデルとそのキャラは？

他方、もう一人サンファンのモデルになったのは「韓国のマイク・タイソン」と呼ばれた実在の男ソ・ Chol。1981年の生まれのソ・ Cholは現在も K - 1 のリングで闘っている現役ボクサーだが、少年時代はタイソンと同じようにひどい生活を送っていたようだ。それを受けて（?）、スクリーン上で展開されるサンファンの少年時代も、ケンカとカツアゲの荒んだ毎日の連続。これでは、警察にお世話になる都度、頭を下げなければならない父親（キ・ジュボン）も大変。

示談金にあてるため現金を必要としたサンファンは、高利貸しのオジサンをかっぱらいのターゲットにしたが、金に執着するこのオジサンから予想以上の強い反撃にあったため、うまくいかず、逆に現行犯逮捕される結果に。しかし、5年という刑期で入れられた少年院の中で彼は、パクコーチ（ピョン・ヒボン）からその人一倍強い負けん気に目をつけられ、「ボクシングをやるか」と誘われた。そしてこれが彼の運命の転換点となった。それ以降サンファンは、アメリカのマイク・タイソンや、かつての日本少年の人気マンガ『あしたのジョー』ばりに、トレーニングに精を出す日々を……。

そして、事故で父を失い、残された祖母も倒れてしまう中、既に実力的には先

輩のクォルロク（キム・スヒョン）を追い越したサンファンは、新人王戦への出場を決意したが……。

ジョージ・フォアマンは45歳でチャンピオンに……

サンファンがマイク・タイソンなら、テシクはジョージ・フォアマン……？
何とジョージ・フォアマンは45歳で世界ヘビー級チャンピオンになったのだ。「それに比べれば、俺はまだ40歳……」と人生のやり直しをテシクに決意させたのは、第1にソバ屋の主人サンチョル（チョン・ホジン）の「ワケありの人生を送っているのはお前だけじゃない」というきつい一言と、腹部へのきついパンチ。酒に溺れながら「殴られ屋」稼業を続けるテシクに対してどこか同情的だったサンチョルにも、きっとテシクに負けなくらいの「ワケあり人生」があったことがすぐにわかる。

第2は、意識朦朧とする中で、テシクの目に焼きついた新人王戦のポスター。1枚のポスターを見て人生が大きく変わることは、実はよくある話。こんな2つのきっかけによる「再挑戦」だが、新人王戦へ出場するためのきついトレーニングは、酒びたりの40歳のおじさんにはとてもムリだと思えたが……。

毎度おなじみのトレーニング風景が……

ボクシング選手のトレーニングには技術面を含めていろいろなものがあるが、その第1は走り込みであり、第2は腹筋の強化。これは『ロッキー』でのトレーニングシーンを思い出せばよくわかるはず。今をときめく亀田興毅、亀田大毅、亀田和毅の三兄弟も、試合前にはこんなトレーニングをやっているはず……。

私が面白いと思ったのは、五木寛之の小説『青春の門』を映画化した『青春の門 自立篇』（77年）の中に、筑豊から上京して早稲田大学に入学した伊吹信介が、ボクシング部に入り、コーチである石井先生から受けていた特訓。それは自分の顔めがけて投げられてくるピンポン玉を、目をつぶらないでギリギリまで見続けたうえ、最後の一瞬に頭を振って避けるという訓練。これは相手のパンチを見切ったり、動体視力を強化するために不可欠なトレーニングだが、すごいのは最初のピンポン玉が次はテニスボールに、そしてついには石灰をまぶしたソフト

ボールにまでなっていたこと……？

新人王戦への出場を決めたサンファンは、練習できる専用のジムがあるが、再起を決意したテシクにはそれすらもない。そんなテシクのトレーニングを支え、試合では「セコンド」になると宣言したのは、それまでテシクに迷惑をかけ続けたウォンテ。にわかづくりだが、強烈な絆で結ばれた2人3脚による過酷なトレーニングの結果は……？

決勝戦はホントは何の勝負……？

所詮赤の他人同士であり、本来交わりあうことなどありえなかったこの2人が出会うことになったのは、なぜ、どこで……？ この2人が初めて出会うことになったのは、互いに人生の再生をかけた新人王戦の決勝戦。6ラウンドの闘いでその勝敗が決するこの決勝戦はもちろんボクシングの試合だが、実はそれ以上にこれは人生を、そして人生の再生をかけた勝負。したがってその試合での勝敗が2人の人生に及ぼす影響は……？ どちらが勝ったか？ そんなことはこの際もどうしてもええやないの……？

1日に2度同じ役者に涙を……

3月6日は、1時から『春が来れば』、3時半からはこの『クライング・フィスト』と連続しての試写室通いだだったが、近日公開されるこの両作品の主役はチェ・ミンシク。『オールド・ボーイ』（03年）でのものすごいアクションシーンが目に焼きついているチェ・ミンシクだが、最初に観た『春が来れば』ではちょっと中途半端なやさしい中年男の姿を、そして次の『クライング・フィスト』では落ちぶれたボクサーが再起していく姿を、ともに感動的に演じている。同じ日に同じ役者の新作を続けて観ることも珍しいが、それ以上にビックリしたのは、同じ役者の演技に涙がポロポロ流れたこと。こんな経験は生まれてはじめて……。

2006(平成18)年3月9日記